



森と海の自然科活動案内 テーマ「里川」 2023年3月吉日
木津川沿い山背古道散策⑤（山城多賀～長池）改訂版

観察河川：南谷川、青谷川、長谷川

木津川右岸を南から北への山背古道散策。今回は前回パスした高神社をカバー、山城多賀駅から長池駅へ歩きます。長池宿が京都と奈良の中間の宿（五里五里の里）。山背古道は次の城陽駅まで設定されていますが、長池駅より北は木津川と離れるので、里川テーマとしての山背古道散策は今回で終了とします。なお当日は青谷梅林の梅まつり開催中です <Bグループ 倭 浅野>

- 1：日時 2023年3月9日（木）10時45分 雨天中止の場合は前夜メールします
 - 2：集合 JR 奈良線山城多賀駅 2階改札前 京都方面から10：40着、奈良方面から10：33着あり
 - 3：持ち物 弁当、飲み物、雨具、双眼鏡（野鳥）ヒレンジャク 等
 - 4：目的地 高神社、市辺天満神社、龍福寺、中天満神社、青谷梅林、長池宿
 - 5：行程 約9km
- 10：45 山城多賀駅 2階改札前 集合（トイレあり） 出発後しばらく南下 0.4km
- 10：50 南谷川 前回通過地点（蛇谷川との合流地点の橋）に（ここから山背古道） 0.4km
青谷川右岸を上流、東へ（山背古道） 0.4km
- 11：00 谷川ホテル公園 0.3km
- 11：05 高神社 参拝 11：10 発 0.3km 参道往復
- 11：15 谷川ホテル公園（トイレあり） 11：25 発 （集落内の山背古道） 0.7km
- 11：30 多賀北部公民館前で右折（奈良街道と合流）（府道70号、車に注意） 北上 0.4km
- 11：35 青谷橋を渡り、青谷川右岸を上流方向、東へ 0.2km
- 11：40 北へ市辺第一幼児公園横（西生寺裏） 小路を通過北上 0.8km
- 11：55 市辺天満神社 参拝 12：00 発 0.8km
- 12：10 建武役城氏之館跡碑を經由、龍福寺の齒痛地藏菩薩 12：15 発 0.1km
- 12：20 中天満神社 参拝（トイレあり） 12：30 発 0.7km
- 12：40 青谷梅林（梅まつり 昼食） 天候良ければ売店（梅うどんなど）あり
- 13：40 青谷梅林発 出口地区より山背古道を歩く 1.3km
- 14：00 府道70号およびJR奈良線を渡り、奈良街道へ合流、北上 0.7km
- 14：10 大蓮寺横通過、山背古道と別れ奈良街道を北上 0.2km
- 14：15 御菓子司松屋 長池宿資料展示 14：30 発 0.2km
- 14：35 長池宿碑 14：40 0.3km
- 14：50 JR長池駅 着 解散（長池の大蛇伝説の案内が駅前にあります）

JRダイヤ 奈良行は15：05 京都行15：11 以後各30分毎

以下参考資料です コントロールキーを押しながらクリックしてリンク先表示してください
[城陽市の観光MAP <城陽市観光協会> \(xn--6oqz6c35b6zh48ipn2e0vs.jp\)](http://xn--6oqz6c35b6zh48ipn2e0vs.jp)

山背古道推進協議会資料 山背古道ルート



山背古道探検マップ 山背古道推進協議会より



以下 見学ポイント概要

○ 高神社 (たかじんじゃ)

高神社は、古くから多賀郷に住む人の信仰を集めてきました。

鎌倉時代の高神社文書には、社殿改築の時に猿楽（さるがく）が奉納されたとあり、これは日本で最初の猿楽に関する記録の一つとなっています。 **京都府指定文化財の本殿は慶長9年（1604）の建立で、桃山時代の絢爛豪華（けんらんごうか）な建築を今に伝えています。** また、社（やしろ）を囲む鎮守の森は、京都百景の一つです。

京都府綴喜郡井手町多賀天王山に鎮座する式内社です。当地の地名「多賀」は『倭名類聚抄』に記載される山城国綴喜郡「多可郷」の遺称であり、古い地名です。

社伝によれば、欽明天皇元年（540年）、東嶽に神霊が降臨し社殿を建てて祀ったと伝えられています。その後、

和銅四年（711年）に字川辺に「東村宮」を建立

神亀二年（725年）に字西畑に「久保村宮」を建立

神亀三年（726年）に字綾の木に「谷村宮」を建立

と伝えられており、この頃には三地区に分かれて祀られていたようです。ただし、現在は「綾ノ木」の地名だけが当社西方700mほどの地に残っており、他の字は不明です。

さらに社伝によれば、元慶二年（878年）の谷村宮の龍神祭で死者の出る喧嘩騒動が発生したため、仁和元年（885年）に現在地の天王山の地に鎮座し三社が統合されたと伝えられています。

近世以前の当社は「大梵天王社」と呼ばれ、大梵天王を祀っていました。社伝では宇多天皇の宸筆による「大梵天王社」の額と称号を賜ったと伝えられ、かなり古くから大梵天王を祀っていたことが示唆されています。

現在の御祭神は「伊邪那岐命」「伊邪那美命」「菊理姫命」ですが、大梵天王は明治の神仏分離により高御産日神に変えて祀られることが多く、当社でも高御産日神を祀るとする資料があります。社伝でも天平三年（731年）に勅願により高御産日神の名より「高」の字を採って「多賀神社」を「高神社」に、「多賀村」を「高村」に改称したと伝えられています。

なお、高神社・高村は承久三年（1221年）に再び多賀神社・多賀村に改称したと伝えられています。

このように当社は異例なほどの複雑な社伝が伝えられています。ただ、高御産日神は造化三神の一柱であり抽象性の高い神なので天平年間に祀られていたとするのは疑問で、後世に大梵天王を祀るようになってからの付会ではないかと思われれます。

また、「伊邪那岐命」「伊邪那美命」を祀るのは、伊邪那岐命が「多賀」の地（一般には兵庫県淡路市多賀の「伊弉諾神宮」もしくは滋賀県多賀町多賀の「多賀大社」）に鎮まったとされることに因み、当地の地名「多賀」が関連付けられたことによると思われれます。

当社のように豊富な社伝が伝えられていてもどこまで史実が反映されているかを明らかにするのは難しく、また当社が当初どのような人々がどのような神を祀ったかも現状では不明です。一説には多可連なる渡来人がいたとも言われていますが根拠はなく、今後の研究が俟たれるところではあります。

なお、当社には文永八年（1271年）の社殿造営の様子を伝える『高神社流記案』が伝えられています。それによれば、社殿の造営にあたって「宝堅（ほうがため）」と呼ばれる神事が行われ、そこで猿楽が奉納された旨が記されています。これは猿楽に関する最古の資料であり、極めて重要です。

当社にはその他400点もの文書が伝えられており、中世以降の神社の様子、民衆の暮らしを知る上で貴重なものとなっています。

○谷川ホテル公園

谷川ホテル公園は、ゲンジホテルの生息地、南谷川に、自然環境や美しい景観をそのまま生かした公園。6月の中旬ごろから、夜になると、やわらかな光りをともしたホテルが飛びかい、夏の訪れを告げる。

日本に生息するホタルは約 34 種に及び、そのうち水棲といわれるのはゲンジボタルとヘイケボタルの 2 種のみで、他のものは生涯陸上で生活します。ゲンジボタルは北は青森から本州、四国、九州の全域で生息しますが、水がきれいであることが条件です。それは、ゲンジボタルのエサであるカワニナにとっても大切なことです。カワニナは山地の湧水にはあまり発生せず、自然と人がバランスよく保たれている場所に大量に発生します。（以上谷川ホタル公園案内板より抜粋）

○市辺天満神社いちのべてんまんじんじゃ

本殿：京都府登録文化財 慶長 11 年（1606）建築と伝えられている。

覆屋に覆われた本殿は鮮やかな朱色で見ごたえあるらしい。

祭神：菅原道真 由緒沿革は不明

境内は京都府環境保全地区。 東側丘陵上には古墳時代後期の円墳 7 基あり

市辺城という城跡（南北朝時代か？）「是東市辺押磐皇子故跡」の石碑 いずれも未確認

このあたりの地名の市辺は第 17 代履中天皇の皇子で顕宗天皇の父である市辺押磐皇子が住んでいたという説がある。市辺押磐皇子（仁徳天皇の孫）は皇位継承争いに敗れ暗殺された

○「建武役城氏館旧址」の碑

このあたり昔は中という村。中城という居館があった。鎌倉時代に六波羅探題が中城の悪党を捕らえるよう山城・大和・伊賀の御家人に命令した記録があり、室町時代の建武年間に城氏の居城となったそうです。

市辺天満神社の鳥居から北へ丘陵沿いに龍福寺と中天満神社へ

○龍福寺

龍福寺は浄土宗、山号は天沢山。1607 年に曇誉(どんよ)が創建、現在地に移転したのが 1674 年(延宝 2 年)と伝えられる。1690 年に火災で焼失、奈良の東大寺から阿弥陀如来坐像を譲り受けご本尊とし 1837 年に随誉が再建、1923 年に再び火災で焼失、翌年再建され、現在に至る。階段を少し上がると、左手正面に本堂。1924 年に再建されたもの。境内には蚕の碑や江戸時代の宝篋印塔が建っている。かつてはこの地区は養蚕が盛んだったようだ。本堂と反対側の墓地参道を少し上がると 2 つ小さな祠が並ぶ。手前の祠は歯痛地藏尊。左手で頬を抑える仕草の石造地藏菩薩坐像で、そのお姿から歯痛で悩む人の身代りとされている。その奥は弘法大師。

○中天満神社

中天満神社は旧中村の産土(うぶすな)神で、ご祭神は菅原道真。中村は歴史の古い集落で、平安時代に編纂された和名抄に、綴喜郡十郷の一つとしてその名が記されている。神社の創記・沿革は明らかでないが、社殿に残されている棟札で最も古いものが慶長 11 年(1606 年)のもの。江戸時代には、境内で雨乞いも行われ、1867 年(慶応 3 年)のおかげ踊りを描いた絵馬が拝殿の正面に掲げられている。

正面の立派な石灯籠に挟まれた石鳥居を抜けて石段を上がると境内に出る。境内には道真との縁のある牛の像があり、平成 2 年(1990 年)の造営竣工記念の碑が建つ。階段の正面に立派な拝殿があり、割拝殿の通路の横には御輿や奉納された牛像、絵馬、古い瓦などが展示されている。拝殿から続く幣殿の階段を上ると本殿。檜皮葺の覆屋を持つ一間社流造で、正面の梁上の蛙股に古い様式を示す鳥獣の透彫が見られる。本殿の周りを回ることが出来、蛭子神社、須久称神社、正森社の末社がある。

○黒土古墳群 (10 基)

中天満神社周辺の丘陵端部および斜面や尾根上には、10 基からなる古墳が存在して、黒土古墳群と呼ばれている。その中で最大のものが境内の北側にある 1 号墳で、南北約 30m、東西約 26m の楕円形の円墳。墳丘は丘陵の端を整形した盛り土で、埋葬部は南西方向に入口をもつ横穴式石室(全長約 9.5m) 須恵器、土師器、耳環(耳飾り)、馬具などが出土している。城陽市域では最大規模で、6 世紀後半頃(古墳時代後期)に造られたものと考えられている。

○青谷梅林

約 20ha の丘陵地に 50 軒あまりの農家、約 1 万本の梅を栽培。その起源は不明であるが、後醍醐天皇の皇子宗良（むねなが）親王が、「風かよふ 綴喜の里の 梅が香を 空にへだつる 中垣ぞなき」という歌を残していることから、鎌倉時代末期には、梅林が存在していたことがうかがえる。江戸時代には淀藩が梅の栽培を奨励し、藩主がしばしば観梅会を催している。

昭和 59 年（1984 年）以降、毎年 2 月下旬から 3 月にかけて梅まつりが催されて 2 万人もの観光客が訪れている。2022 年はコロナのため中止された。

また青谷梅林は観光だけでなく果実からいろいろな製品を作るための生産梅林でもあります。青谷特産の城州白をはじめ、白加賀、小梅など。2 月下旬から 3 月上旬にかけて咲き誇り梅の香りに包まれます。梅の収穫は 6 月下旬ごろ。

○御菓子司松屋

JR 長池駅前、旧大和街道（奈良街道）の宿場町長池宿の元旅籠、明治 29 年（1896）奈良鉄道の開通で衰退、菓子司（芋ようかん他）として生まれ変わった。長池宿の資料展示。

○長池宿

京都と奈良の中間地点。五里五里。長池宿の石碑には北は京都街道、南は奈良街道と書いてあるそうです。江戸時代を通じて旅人の宿泊、休憩で賑わった。伊能忠敬も宿泊。かつての旅籠松屋に資料展示。

○雨乞い地蔵

常楽寺所有の蓮池（常楽池）にある屋形の中に収められ、常時水没している雨乞い地蔵。日照りが続くと池の中から引き揚げて雨乞いの祈祷。乾くのが嫌で雨を降らせる。最近では平成6年（1994）雨乞いの儀式、昼に実施、夕方には降雨（NHKで放映された）

2023/3/5 下見時には屋形と看板のみで、蓮池？の水は無く、お地蔵様は確認できなかった

周囲の沼地は湧水を活用したハナショウブ、カキツバタの栽培地。毎年5月中旬に「花しょうぶまつり」が開かれる。

雨乞い地蔵の近くの「水気耕栽培センター」では土を使わずトマト、カラーなど栽培出荷しているそうです。

○森山遺跡

木津川を見渡せる丘陵地に広がる縄文時代から古墳時代にかけての集落遺跡。遺跡公園として一部が復元展示されている という説明だが、**全体は遺跡イメージの遊具が点在する児童公園という雰囲気**

○青谷梅工房

青谷の城州白を使った梅干しと梅の商品。小学校で教師をされていた田中さんが青谷梅林の里山の風景に魅せられて55歳で退職し、2011年にオープンした店。城州白などの梅の土産を購入できるほか、店内のテーブルで梅しらす丼や梅うどん、梅コロケなどの食事や城州白ビールや梅ジュース、梅ソフトクリーム、青谷の城陽酒造が製造する日本酒、梅酒などを戴くことが出来る。そうです。10%まで減塩された「白漬梅」はマイルドで食べやすい梅干、チーズやトマトともマッチする そうです。

小規模店舗。2023/3/5 下見時には梅まつり期間中で地域に数少ない商店としてにぎわっていた

○淀姫さんの祠

木津川右岸の堤防下の祠 天井川の水難除けに奈島地域の住民に大切に祀られている京都市伏見区淀の興杼よど神社の祭神、豊玉日女命が水を操る水難除けの神として信仰され、これが淀姫さんと呼ばれている。淀殿（浅井茶々）さんとは無関係。旧生れ口樋門跡記念碑もある

○生れ口樋門 排水機場

○桜づつみ富野緑地

城陽市の木津川沿いに6か所で堤を拡幅し緑地を整備。寺田地区、枇杷庄地区、奈島地区等

○城陽市内の木津川河川敷

約31haの茶園、年間30tのお茶が生産されている。

すべて高級茶で9割がてん茶（抹茶の原料）、1割が玉露。300年前から栽培の記録がある。